

加藤清正の実像

天正16年(1588)閏5月、27歳にして肥後半国の領主となった清正。秀吉が朝鮮出兵に向けて最重要拠点と位置付ける肥後に、なぜ一家臣に過ぎなかった清正が配置されたのでしょうか。今回は清正を抜擢した秀吉の意図を探ります。

〈10〉領主任命の背景

なぜ清正は肥後半国の領主に任命されたのか。

この問題は、長い間真剣に議論されたことはありませんでした。従来、この問いに対しては「清正自身が朝鮮出兵の先鋒を希望したため肥後を望んだ」「秀吉子飼いの武将だから」などと説明されてきましたが、果たしてこれは事実なのでしょうか。武勇を誇る清正が秀吉に一国を所望して、それを秀吉が認めたとする逸話が有名ですが、これは後世に創作されたものでしょう。しかも当時の史料を見ると、戦における清正の実戦経験は少なく、目立った武功と言えば賤ヶ岳の合戦ぐらいです。後世語り継がれているような武勇に優れた武将の姿はそこにはありません。史料から浮かび上がってくる人間像は、軍人ではなく能吏※・清正の姿です。

では、時間を遡って肥後入国以前における清正の経歴を見てみましょう。そこに清正が領主に任命された本当の理由が隠されています。まず、清正の大きな役割として蔵入地(秀吉の直轄領)の管理を任されていることが注目されます。蔵入地は豊臣政権を支える財政基盤であるため、その管理は重要な任務でした。最初に清正が任された地域は、播磨国(現在の兵庫県)にある5,000石程の蔵入地です。これは天正14年のことで、同時に清正は主計頭を名乗り始めていますので、ここから清正は蔵入地代官としてのキャリアをスタートさせたと思われる。次に判明する蔵入地は、讃岐国(現在の香川県)です。この地は本来、尾藤知宣の所領でしたが、天正15年の九州攻めで知宣が失態を演じたため所領を取り上げられ、領主不在となっていました。そこで、秀吉は清正を讃岐国に派遣して領内蔵入地の現況調査を命じています。これが天正15年8月頃のことです。この時、清正は九州攻めの戦後処理のため九州にいますので、実際には清正ではなく家臣が実務にあたったようです。また、このほかに和泉国(現在の大阪府南部)の堺周辺の蔵入地代官も務めていた形跡があります

が、詳しいことは不明です。このように数か所の蔵入地を担当した経験が、清正にとっては領主へステップアップするための実績となり、その後の道を開きました。言い換えれば、蔵入地の管理という秀吉が与えた重要任務を問題なく遂行したことで、秀吉の信頼を得、肥後半国の領主に登用されたと言えます。実際に、秀吉は書状の中で「お前は何事にもよく頑張り、役に立つので」と肥後を与えた理由を述べ、それまでの清正の働きぶりを高く評価しています。

さて、秀吉が理想とする人材に成長した清正ですが、なぜ肥後だったのでしょうか。当時の史料を読む限りでは、清正の肥後配置は決して既定路線ではなく、秀吉の現実に即した人事査定を経て決定されたことが分かります。清正の場合、天正15年4月に九州攻めで肥後に来て以来、国衆一揆の鎮圧やその後の戦後処理、また翌16年正月から4月頃まで実施された上使衆検地やその後の城番任務に至るまでの行動を見ると、領主に就任する1年以上も前から清正は肥後を拠点に活動していることが分かります。つまり、清正は秀吉家臣の中でもっとも肥後の実情に通じた人物になっていたのです。結果的に、これらの経験が清正が肥後に送り込まれる決定的な要因となりました。

秀吉の政治方針や与えられた指示を理解し、それを忠実に実践できる経験や能力を兼ね備え、かつ肥後という国に1年以上も深く関わり、内情を知り尽くしている人物は清正以外にいなかったわけです。秀吉ならではの適材適所の家臣起用が見て取れます。

清正は戦に強い武将としてではなく、優れた行政マンとして肥後に送り込まれたというのが妥当な見方ではないでしょうか。

※能吏…有能な役人

このコーナーは、大浪和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

